



森林を守り、育て、活かし、豊かな森を未来に引き継ごう



■表紙写真 題名：霧につつまれて 撮影地：駿東郡小山町立山 撮影者：鈴木秀樹氏（川崎市）

本誌のバックナンバーは、静岡県山林協会ホームページでご覧いただけます。
ホームページには、林業への就業を考えている方の参考になる記事も掲載しています。

URL : <https://www.moritohito.jp>



INDEX

- 2** 支部だより①（井川森林組合）
密着！4年の軌跡
～井川の木は私たちの自慢！いかわっこ奮闘記～
- 3** 支部だより②（菊川市農林課）
竹林整備と竹の活用による里山の再生について
- 4** 支部だより③（東伊豆町農林水産課）
東伊豆町「満点の海・山・空」のまちづくり
- 5** 特別寄稿（中部農林事務所森林整備課 吉永沙季）
マラウイでの水を守る森林保全活動
- 6** 県庁だより①（経済産業部 森林・林業局 林業振興課 県産材利用班）
選手村ビレッジプラザへの県産森林認証材の提供と
オリンピック後を見据えた県産材製品の需要拡大
- 7** 県庁だより②（くらし・環境部 環境局 自然保護課）
静岡県レッドデータブックの改訂
- 8** 本部情報
令和元年度第4回理事会について
図書の案内

支部 だより①

密着！4年の軌跡

～井川の木は私たちの自慢！いかわっこ奮闘記～

井川森林組合

地元の木でベンチづくりを実現した小学生の想いとそれをサポートした森林組合の取組について紹介いただきました。

今年、春に見舞われた新型コロナウイルス騒動。多くの学校では卒業式や入学式を満足な形で開くことができませんでした。感染とは無関係だった山間地の井川でも、学校行事に関しては都市部と同じ対応を取らざるを得ませんでした。

井川の木ってすごいね！

今年3月、小学部の課程を2人の児童が修了しました。（井川では小中学校が統合し、井川小中学校となっているので、小学6年の卒業式と中学1年の入学式は通常行いません。）彼らが小学3年生の時、学校での授業をきっかけに自分たちが暮らす井川の“すごいこと”を探していました。その中で井川の木を使った築100年以上も経つお宅を見つけ、いまでもそのお宅には生活している人がいて、建物が頑丈にできていることに驚きました。そして、そんな長持ちする井川の木を使って、自分たちも学校で遊ぶための木の遊具を作りたいと考えました。

遊具と言っても、子供たちの夢は大きく、アスレチックを作ろう！と考えました。段ボールで試作品も作り、学校に設置するためにはどうしたらいいか、市の教育委員会の担当者に聞いたり、実際に作るために、



木の種類は何かいいか、費用や時間はどのくらいかかるかを森林組合の担当者に聞いたりしました。私たち森林組合は、地元の学校とは、長年、みどりの少年団活動でお付き合いがあります。その中で、先生方がどのように子供を導いていくかについて話し合いをしていました。私たちは、子供たちの希望通りに設計し、子供たちに正直に、かかる費用がウン百万円以上、時間はお父さんたちに仕事を休んでもらって造っても3か月かかるという話をしました。その時の子供たちの表情はいまでも忘れません。「自分たちの力では、手に負えない・・・」声には出せませんでした。曇った顔がそう訴えていました。

そのとき先生方も私たちも、この難題を子供たちが自身の手でどのように打開していくのか、ただただ見守っていました。

自分たちの強い思いで、逆境に打ち克つ

子供たちは自ら一つの答えを出しました。それは「やっぱり井川の木を使いたい！」。そして「自分たちでもできることは何だろうか？」当初のアスレチックの夢は断念しましたが、すでに現実的な目標を見つけ、歩み始めていました。「みんなが集まることができるベンチを作りたい！」

作るものが決まったら、あとは実行に移すのみ！子供たち自身のベンチのデザインをもとに組合の担当者が設計のアドバイス、そして組合長に直談判！井川の木を大切にしたいという気持ちと、長持ちする井川の木をどうしても使いたいという気持ち



を伝えました。すると組合長は現場担当者に、子供たちの希望に叶うような木を提供するよう指示を出しました。その代わりに一つ条件をつけました。「子供たちが自分たちで伐採を行うこと。」もちろん、作業は職員のサポートのもと行いましたが、子供たちは、実際の間伐施業地で伐採する木を決め、チェーンソーの使い方や安全な作業のための指差し呼称なども教えてもらいました。伐りだした木材は、設計通りにさらに伐り分け、学校に持ち帰り、先生や子供たち全員で数か月かけて磨き、塗装し仕上げました。

今年3月、小学3年生だったあの2人が、小学部を終えるにあたり、卒業式に近いような形で先生方が催しを開いてくれました。ベンチ製作の過程にもたまたま関わっていた私が、その日たまたま学校にお邪魔したとき、偶然にも彼ら2人が、卒業証書とともに記念撮影しているところに出会いました。あまりに偶然が重なったので、これこそ井川の木がもたらした運命なのかなと、今回寄稿させていただきました。

井川の木、すごいでしょ！



▲上の写真が完成時（4年生）、下が卒業時

支部 だより②

竹林整備と竹の活用による 里山の再生について

菊川市 農林課

「里山の再生」を目指して、竹林の整備や伐採した竹の活用に取り組んでいるNPO法人「里山再生クラブ」の活動について紹介いただきました。

菊川市の概要

菊川市は、静岡県の中西部、静岡市と浜松市のほぼ中間に位置し、みどり豊かな自然環境と都市機能が共存するまちです。

南アルプスの支脈、栗ヶ岳山麓を水源とする一級河川「菊川」が中心部を流れ、市内各所に縄文・弥生時代の遺跡があり、明治初頭の大規模開拓により形作られた、牧之原台地に広がる「日本一の大茶園」により、「お茶のまち 菊川」としても広く知られています。また、JR東海道本線菊川駅、東名高速道路菊川ICなどがあり、御前崎港、富士山静岡空港、新幹線掛川駅に近接するなど交通の要衝となっています。

市の総面積9,419haのうち森林面積は2,174haで約23%を占めています。このうち、森林整備計画の対象としている森林は2,149haで、スギ、ヒノキを中心とした人工林面積は872haありますが、積極的な林業経営は行われていません。また、近年では市内全域の森林が竹の侵入に悩まされています。

今回は、このような状況の中で、積極的な竹林の整備や竹材活用により、「地域里山の再生」を目指し活動を行っている、市内のNPO法人「里山再生クラブ」の活動をご紹介します。

里山再生クラブの活動

里山再生クラブでは日頃より「森の再生事業」として荒廃の原因となっている竹林を伐採し里山の整備を行っており、また、「森の保全事業」として森の再生事業で伐採した

竹を活用する活動を行っています。

この中でも特に市民に人気なのが「竹粉」です。竹粉は、竹を粉碎機等で粉状にしたもので、含まれている乳酸菌が土中の微生物活性化を助けるため土壌改良材として使用できるほか、家庭で出る生ごみと混ぜることで、消臭効果により臭いを抑えながら生ごみを分解し堆肥に変えることが出来ます。



▲生ごみと竹粉を混ぜた状態



▲約4週間後、生ごみが分解されて堆肥になりました

里山再生クラブで作られた竹粉は、市窓口で希望者に配布し評判を得ているほか、中高生が里山再生クラブと共に竹粉づくりを行うセミナーも例年人気となっています。

また、里山再生クラブは県の「海岸防災林造成事業“ふじのくに森の防潮堤づくり”」に協力し、伐採竹を提供しています。提供した伐採竹は竹簀に加工され、海岸に植栽した樹木を台風や塩害、流砂による被害



▲中高生向けセミナーでの竹粉づくり

から守る防風垣となります。県下で伐採竹を提供できる事業者が数少ないことや、里山再生クラブでは毎年継続的に竹林整備を行っていることから、今後についても安定した供給が期待されています。



▲“ふじのくに森の防潮堤づくり”の防風垣

これ以外にも、毎年里山再生クラブが主催する「里山まつり」や「穂先タケノコメンマづくり体験」は市外からも人の集まる人気イベントとなっています。



▲里山まつり

最後に

竹林の拡大は菊川市のみならず、全国的にも大きな問題となっています。増えゆく竹林を資源として活用し、市民の賑わいの場や環境にやさしい資源を作る活動を続ける里山再生クラブとこれからも協力、連携して地域森林の保全に取り組みたいと考えています。

支部 だより ③

東伊豆町「満点の海・山・空」のまちづくり

東伊豆町 農林水産課



▲東伊豆海のみえる農園

海や山、温泉といった豊かな自然環境を活かし、みんなが安心して暮らせる町、笑顔あふれる町を目指して進めている取組について紹介いただきました。

東伊豆町ってこんなところ

東伊豆町は、伊豆半島東海岸の中央に位置し、海と山に囲まれた自然豊かな町です。豊富な温泉からなる6つの温泉郷（大川・北川・熱川・片瀬・白田・稲取）で形成され、気候も温暖で過ごしやすく、この豊富な温泉と海の幸山の幸を活かした観光業が主幹産業となっています。年間約74万人の観光宿泊客に加え、首都圏からも比較的近い場所にあるので日帰り旅行者も多い町です。

まちづくりの目標を「満点の海・山・空」と定め、豊富な自然資源を活かし、住民・企業・行政の協働によるまちづくりに取り組むとともに、「みんなが安心して暮らせる町、笑顔あふれる町づくり」を目指しています。

海のお宝がいっぱい稲取漁港

太古より漁港として栄えた伊豆稲取。稲取一帯は、入り組んだ海岸線と岩礁に富んだ海岸に恵まれ、アワビ・サザエ・伊勢海老・天草や伊豆大島近海より金目鯛が盛んに水揚げされています。その中でも「稲取キンメ」は東伊豆を代表する特産品として全国的に有名です。「稲取キンメ」とは東伊豆稲取漁港で日戻り操業（日の出から操業し午後4時まで



▲稲取キンメ

に入港）で水揚げされた一本釣りの金目鯛のことです。立縄釣り（一本釣り）漁で丁寧に扱い、船上から水氷保存により品質を管理しています。この稲取漁港では約70隻の船が操業しており、たくさんの漁師が「稲取キンメ」を支えています。

地元民の笑顔がいっぱい「港の朝市」

稲取漁港で水揚げされた「稲取キンメ」をはじめ、魚介類や地元で取れた新鮮な野菜や果物、お菓子、パンやお弁当、加工食品など、澄んだ朝の空気の中、活気ある声が飛び交っています。土日祝祭日の午前8時～12時、場所は休日で空いた東伊豆町役場庁舎の駐車場を利用しています。

東伊豆 海のみえる農園

ドイツ語でクラインガルテンという言葉があります。「小さな庭」という意味ですが、ドイツを始めとしたヨーロッパ諸国で200年もの歴史をもつ農地の賃借制度になります。都市生活における市民のために作られた農園のことを言います。この農園にはラウベと呼ばれる小屋と芝生、花壇、畑などが配置されます。また利用者同士が集う管理棟や広場などが整えられており、単なる菜園ではなく、コミュニティ形成の場としてもそれぞれが重要な役割を担います。

これに倣い東伊豆町の稲取地区において「東伊豆海のみえる農園」を運営しています。相模灘や伊豆七島が望める眺望豊かな農園で、国道135号線からすぐの場所にあり、2

種類の農園を運営しています。

まずは滞在しながら農園を楽しむ「滞在型農園」。休憩施設に各40㎡の農地を付設しており現在10区画を運営しています。人気があり空室待ちも出ています。もうひとつは農地だけを貸し出し、日帰りで農園を楽しむ「日帰り型農園」。この農園では40㎡～50㎡の農地を計50区画整備し、農地を持たない町内外の方たちがちょっとした空き時間で海を見ながら農業菜園を楽しめます。



▲滞在型農園エリア

太陽の日を浴びて野菜も健康も育てよう

「東伊豆海のみえる農園」では野菜の苗植えや種まき、収穫祭など毎年様々なイベントを行っています。町内外の住民の皆さんに参加を呼びかけ、農作業を通じて交流や健康増進を図ってもらう目的があります。特にお子様や高齢者の方々には保護者や福祉施設を通じて参加を募り、作業の中から自然と会話が弾み、笑顔が生まれるとともに体験を共有することで連帯感を持ちながら集団行動が養われ、孤立感を軽減する効果も期待されます。また農作業を通じて身体を動かし筋力や体力の低下を防ぐ効果もあります。

特別寄稿

マラウイでの水を守る 森林保全活動

中部農林事務所森林整備課 吉永沙季

独立行政法人国際協力機構（JICA）の海外協力隊として、アフリカのマラウイ国に環境教育等のため派遣された吉永沙季さんに、現地での活動状況について報告いただきました。



▲水源林内で森林土壌の解説

はじめに

私は、2018年7月から2年間JICA海外協力隊としてマラウイの首都リロングウェ市にあるリロングウェ水公社へ派遣されました。現地からの要請内容は、安全な水や森林保全に関する環境教育の実施、植林イベント等の企画・提案、市民への節水の呼びかけということでした。

安全な水の供給が課題

リロングウェ水公社は人口120万人を給水対象とする首都で唯一の上水道事業を担う公社です。同市の上水道普及率は2018年時点で83%であり、17%の人々は安全な水へのアクセスがない、つまり上水道のインフラ整備が行き届いていないことから、浅井戸や川の水を生活用水として利用しています。このような衛生状態は、水由来の病気、コレラ等の発生リスクを高めます。また、同市は人口増に伴う水需要増が著しく、水需要量が水供給量を上回っています。水資源は限られているため、既存の水資源を最大限利用してすべての人に安全で安定的に水を届けるといったことが大きな課題となっています。

森林破壊が進む水源林

同市の水源林であるザラニヤマでは、薪炭材生産のための違法伐採による森林破壊が深刻で、水資源の縮小が危惧されています。マラウイでは、家庭の約88%が薪を調理用エネルギーとして利用していることから、森林破壊を食い止めるために薪炭材の生産をすぐにストップさせることは困難です。そのため、植林だけでなく、自然林での違法伐採から

プランテーションでの合法伐採・炭生産へと徐々にシフトする取り組みが進められています。水公社としては、マラウイの森林局と協力して植樹祭を開催する等、毎年約30,000本以上の木を植えています。



▲市内のセカンダリースクール、村人と実施した植樹祭

Madzi Club

環境教育プログラムの内容は、水公社が抱える課題を考慮し、水源林保全の必要性と節水に的を絞って実施しました。市内にあるプライマリースクールとセカンダリースクールのうち5校を選定し、Madzi Club（Madzi（マジ）：現地語で水という意味）というクラブを立ち上げ、出前講座、水源林視察、浄水場見学、植樹祭開催等を実施しました。教科書以外で水源林等見たことがないという子供たちが多く、上流から下流までどのような人が関わり飲み水が届けられているのかを伝えるため、簡単な実験のほか、実際に現地に行ってみるといった体験学習に重点を置きました。

合法炭の販売支援

マラウイの森林局は、植林だけでなくプランテーションで育てられて

いるユーカリを利用した合法炭の生産・販売を試みようとしていました。ある程度意識が高いはずの水公社の職員であっても、その大多数が家庭で違法炭を使用している現状の中、まずは職員の意識改革が必要だと思い、水公社内で定期的に合法炭の販売を行うことにしました。この合法炭は、違法炭に比べて非常に高価ですが、コンセプトを聞いて納得して購入してくれる職員もあり、販売促進に関わるプロジェクトメンバーの自信に繋がりました。



▲職場の一角で実施した炭販売

おわりに

マラウイでは、水供給の目線で森林保全に関わりました。その日暮らしをする人々が多くいる中で、街から遠い場所で起きている森林破壊を心配することは難しいです。それでも、様々な切り口で人々の関心が森林に向くよう地道な取り組みが必要だということを実感しました。今後もJICA協力隊派遣を通して培った知見を活かして、森と人をつなげる取り組みを支援していきたいと思っています。

県庁だより①

選手村ビレッジプラザへの 県産森林認証材の提供と オリンピック後を見据えた 県産材製品の需要拡大

経済産業部 森林・林業局
林業振興課 県産材利用班

オリンピック・パラリンピック関連施設にオール静岡で県産森林認証材を提供した取組と、ポスト五輪を見据えた需要拡大策について紹介いただきました。

選手村ビレッジプラザへの 県産森林認証材製品の提供

東京2020オリンピック・パラリンピック関連施設では、積極的に国産材、森林認証材が使われています。その一つである選手村ビレッジプラザは、木造の仮施設であり、全国の自治体から木材を借り受け、大会終了後に返却、各地でレガシーとして活用するプロジェクトにより整備されました。

県内には、全国4位（FSC2位・SGEC7位）の面積となる6.7万ha（H30）の森林認証林があり、認証材の加工・供給体制も整っています。認証材製品の品質と供給力を全国に発信し、販路拡大に繋げるため、県は、プロジェクトに協力し、41㎡、約1,200本の木材を提供しました。

平成31年4月から、県内各地の林業・木材産業関係者によるオール静岡の協力体制で、FSC・SGEC双方の森林認証林から丸太を調達、品質の確かなJAS製品として、柱、梁、床材等に製材・加工し、令和元年9～10月に納材しました。



▲提供木材の出発式（県庁本館前）

県のほか、浜松市、静岡市、小山町が提供した84㎡の県産森林認証材製品は、ビレッジプラザ全体で使用された木材の6％分に当たり、存在

感を放っています。ビレッジプラザの設計監理の担当者からは、提供した木材の品質の高さを称賛され、「静岡県のプライドを感じた」と、静岡の木の優秀さ、製材・加工の技術の高さを証明する言葉をいただき、大きな自信を持つとともに、供給力を示すことができたと感じています。



▲選手村ビレッジプラザ（東京都・晴海）

オリンピック後を見据えた取組

オリンピック関連施設での利用を契機とした全国的な木材利用の機運の高まりに加え、建築基準法改正や技術開発などにより、都市部の非住宅分野を中心に木材需要の拡大が見込まれています。

その流れの中で、令和元年度、県産材製品の需要拡大に向けて、木材製品マーケットの現状と今後の需要



▲ビレッジプラザでの県産森林認証材製品の使用状況



▲選手村ビレッジプラザ内覧会（東京都・晴海）

動向、県産材製品の供給体制を把握・分析するとともに、製材・流通事業者等へのアンケートやヒアリング、意見交換などを通じて現場の方々から多くの御意見をいただき、オリンピック後を見据えた取組の方向性を整理しました。

取組の方向性

○県内の住宅分野

競争力を高め、3割程度に留まる県産材製品のシェア拡大

○県内・首都圏の非住宅分野

住宅用の製材品で対応可能な小・中規模建築物の需要を獲得

今後は、製材工場等の生産性向上、品質の確かな製品の供給体制の拡充、県内・首都圏の販路開拓などを促進していきます。

令和2年度の新たな支援制度

○しずおか木使い施設推進事業

しずおか優良木材、県産JAS製材品等を使用して木造化・木質化を行う民間の非住宅建築（兼用住宅含む）に対して助成

○販路開拓マッチング支援

県産材製品の供給者と新たな需要を創出する事業者のマッチングと、その連携による販路開拓の取組の具体化を支援

○JAS認証取得支援

非住宅建築で求められ、国内共通基準であるJAS認証の取得を支援



県庁だより②

静岡県レッドデータブックの改訂

くらし・環境部 環境局 自然保護課

絶滅のおそれのある野生生物の分布や生息・生育状況について取りまとめた静岡県版のレッドデータブックなどについて紹介いただきました。

静岡県レッドデータブックの改訂

レッドデータブックは、絶滅の可能性のある野生生物の分布や生息・生育状況について詳細に取りまとめたものです。

静岡県のレッドデータブックは平成16年に初版が公表されましたが、初版公表時から野生生物の生息・生育状況は著しく変化しており、見直しが必要となりました。そこで、野生生物の生息・生育状況を改めて調査し、判明した変化や新たに得られた知見を取りまとめた改訂版を公表しました。平成31年3月に改訂した「動物編」、令和2年3月に改訂した「植物・菌類編」をそれぞれホームページに掲載しています。



静岡県
レッドデータブック

素晴らしい自然があります。令和2年3月にレッドデータブックと併せて改訂した「静岡県野生生物目録」では、**県内で確認された約1万5千種類の野生生物を記録**しています。

県では、これらの自然が有する豊かな生物多様性の保全と持続可能な利用に向けて取り組む方向を示した「ふじのくに生物多様性地域戦略」を平成30年3月に策定しました。レッドデータブックの内容はこの戦略の基礎資料としても活用されています。



ふじのくに
生物多様性地域戦略

生物多様性に迫る危機を知る

レッドデータブックにおいて**絶滅危惧種（絶滅のおそれのある種）として掲載した野生生物の種数は618種類**で、確認された

在来種の約5%です。

生物多様性に迫る危機や絶滅の危機にある野生生物について、より多くの皆様に理解を深めていただくため、レッドデータブックの内容を分かりやすく編集した「レッドデータブック普及版」を出版しました。人間の活動がどのような地域

のどのような生物に影響を与えるかを平易に解説しています。県内の書店で取り扱っていますので、ご一読いただければ幸いです。



▲改訂した静岡県レッドデータブック「動物編」（左）と「植物・菌類編」（右）

ふじのくに生物多様性地域戦略

静岡県には、世界遺産の富士山をはじめ、南アルプス、伊豆半島、浜名湖などに代表される、世界に誇る



▲静岡県レッドデータブック普及版
1,364円＋税

また、ふじのくに地球環境史ミュージアムでは、レッドデータブックに関する企画展「消えゆく隣人ー静岡県レッドリストの絶滅危惧種ー」を8月23日(日)まで開催しています。レッドデータブックに掲載されている野生生物の標本等が展示されていますので、是非お越しください。



▲ふじのくに地球環境史ミュージアム企画展
「消えゆく隣人ー静岡県レッドリストの絶滅危惧種ー」

生物多様性を守るため

生物多様性に迫る危機の多くは複合的で、正確に把握することは非常に困難です。そのため、身近な自然を観察し続け、変化をより早く察知することが重要であり、多くの皆様のお力添えが必要です。静岡県の生物多様性に富んだ美しく豊かな自然を後世に継承するため、私たちにできることを一緒に考えていきましょう。

本部情報

令和元年度第4回理事会について

次年度の事業計画や予算について審議するため例年5月に開催している理事会につきましては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け書面表決といたしました。その結果、令和2年度事業計画及び予算について決議されました。当協会では、令和2年度の新たな取組として、現場への早期導入を目指して先端技術の活用による林業イノベーションの取組を支援してまいります。また、ホームページについて、より見やすいサイトになるよう、充実させてまいります。

図書の案内

山林協会では、一般社団法人全国林業改良普及協会（全林協）が出版する普及図書の斡旋を行っています。当協会を通じて申し込んでいただくと、「林業新知識」「現代林業」の2誌は特別価格での購読、その他の図書は送料が無料となるメリットがあります。購入を希望される方は、電話、FAXまたはメールで右記までお問合せください。なお、図書の見本は、山林協会にありますので、どうぞご覧ください。

公益社団法人静岡県山林協会
TEL: 054-255-4488
FAX: 054-255-4489
E-mail: sanrinky@vega.ocn.ne.jp

全林協の出版物から



月間「林業新知識」

林家や現場技術者などが実践した林業技術やノウハウを現場で取材し、山林経営や実践に役立つ情報を集めた月刊誌です。

月間「現代林業」

林業のトレンドをリードする雑誌として、林業技術や林業政策などのタイムリーなテーマについてわかりやすく紹介する月刊誌です。

林業改良普及双書

森林・林業に関する新書版のシリーズです。



単行本

実践的な技術書や実務書、林業の入門ガイド、森林ボランティアや市民活動向けのガイドブックなど、様々な単行本を発行しています。



パンフレット類

森林・林業関係の制度紹介や事業説明用、森林環境教育や一般市民向けなど、様々なパンフレットを発行しています。